様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２６６７

研究課題名（和文）戦前・戦後の連続と断絶の視点から見た沖縄の「子ども」をめぐる教育・文化実践史研究

研究課題名（英文）Research on the History of Educational and Cultural Practices Surrounding Children in Okinawa from the Perspective of Prewar and Postwar Continuity and Discontinuity

研究代表者
斎木　喜美子（SAIKI, Kimiko）

関西学院大学・教育学部・教授

研究者番号：３０３８７６３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では，民俗学，教育学（教育史，美術教育）児童文学を専門領域とする複数の研究者が，それぞれの研究関心に基づいて「沖縄」の教育・文化の歴史的課題に取り組んだ。研究期間内には定期的に研究会を開催して研究成果の共有を図るとともに，それぞれが所属大学の研究紀要や学会誌等に論文発表を行ってきた。最終年度には発掘してきた具体的な史料を紹介しつつ，戦前から戦後の沖縄における教育・文化実践の実相と課題を論文にまとめ，『立ち上がる艦砲の喰残し－沖縄における教育・文化の戦後復興』(関西学院大学出版会，2022年）として刊行し，研究成果を世に問うた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は戦前から戦後沖縄の人的資源に着目し，沖縄戦後の教育・文化実践の実態と課題を，彼らの思想の連続と断絶，占領政策の中で生じた矛盾や葛藤等から読み解こうとしている点に独自性がある。また，従来の沖縄研究の戦前～戦後の史料や研究状況の空白を埋め，文教政策，占領政策との関連を明確にするだけでなく，僻地の文化資本の価値や地域教育・文化実践の実相や課題に言及している点にも特長がある。さらに，一つのテーマを異領域の専門性を持つ研究者たちの協同によって多角的な視点から掘り下げることによって，沖縄研究により深い解釈や知見を提供している。

研究成果の概要（英文）：In this study, several researchers specializing in folklore studies, pedagogy (education history, art education), and children’s literature examined historical issues surrounding education and culture in Okinawa, each focusing on their respective research interests. During the research period, regular meetings were held to share findings. In addition, each researcher published articles in their affiliated university’s research bulletins and academic journals. In the final year of the project, the researchers introduced the specific historical materials they had discovered and compiled the realities and issues of educational and cultural practices in Okinawa from the prewar to the postwar period. The findings were published in “The ‘Leftover Scraps’ of Battleship Gunfire: Postwar Reconstruction of Education and Culture in Okinawa” (Kwansei Gakuin University Press, 2021) and released to the public.

研究分野：教育学

キーワード：沖縄　教育史　文化史　戦前　戦後　子ども

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究代表者は沖縄における「子ども」の文化と教育の問題に関心を持ち，長年にわたってこれまで未解明であった近現代沖縄の児童文化・文学史の研究に取り組んできた。2004 年に出版した『近代沖縄における児童文化・児童文学の研究』（風間書房）は，当該分野における最初の鍬入れともいえる研究書であり，研究代表者の原点ともなった成果であった。

その後も研究代表者は，ライフワークとして沖縄の児童文化・文学史研究を継続してきたが，その間に新たな課題も鮮明化されていった。それは，従来の沖縄研究には「子ども」を対象とした具体的な史料や実践事例を当時の歴史的文脈に位置づけ，「子ども」を取りまく教育・文化全体を俯瞰する視点が欠けているという点であった。研究代表者の研究成果においても，沖縄の課題を本土との歴史性の関係，占領地の教育システムとの関係性において本質的に掘り下げ，多角的な研究視点から沖縄の「子ども」の教育・文化史の全体像を構築するには至っていない。すなわち，戦後日本教育史，思想史研究における沖縄研究には，「子ども」を主体とした「具体的実践」の蓄積，思想の変遷という研究視点からの成果が乏しいのである。1879 年の首里城明け渡し後の通称「大和世」の時代から，地上戦を経て米軍統治下にあった「アメリカ世」の戦後へと，激動の時代を生き抜いた人々が，「子ども」の未来に何を描き実践してきたのか，そのことが戦後社会にどのような影響を与えたのか。本研究では，沖縄の歴史の連続性と不連続性を意識しつつ，近代以降の「子ども」の文化・教育の課題を明らかにし，戦前から戦後の沖縄における「子ども」の教育・文化実践の全体像を描き出そうと構想した。

そこで，これまで取り組んできた研究成果を土台として，以下の 2 点を研究の柱に据えることにした。

①教育・文化実践を，当時の沖縄の文教政策，実践者のライフコース研究の総体の中でとらえること。

実践の実態と思想はともに時代の制約を強く受け，子どもの生活と分かちがたく結びついているため，子どもの置かれた状況と教育・文化政策の課題を端的に読み取れる性格を持つ。したがって，一次史料散逸の著しい沖縄史研究においては，人物に焦点化した考察が不可欠であると考えた。

②従来の先行研究から抜け落ちてきた沖縄島嶼部の教育実践，地域の芸術文化実践の担い手たちの記録と記憶の蓄積と分析，新教科書編纂，教育課程編成における沖縄の独自性，教育目標と内容を検討すること。

これらは特に沖縄戦後の教育・文化を重層的にとらえるうえで重要な視点であるにも関わらず，十分な整理と分析がなされてこなかった課題でもある。

以上のことから本研究では，戦前から戦後の教育・文化復興に中心的役割を果たした教育者，文化人たちへ調査の幅を広げ，彼らの文化資本の背景を含む実践の総体を明らかにすることを目指した。これは未解明の課題であり，基礎史料の発掘と整理だけでも十分に学術的価値があると見込んだからである。さらに，米軍統治期に行われた離日政策の背景にある近代沖縄教育・文化統合への同化と異化，戦後米軍への順応と抵抗，その中で沖縄の教育・文化がいかに構想されたかを実践に即して記述する。とりわけ「子ども」を取り巻く状況や実践の意味を歴史的文脈に即して読み解くことで，沖縄学における教育や文化実践史研究に新たな研究視点を付与できるのではないかと考えたことが，本研究の背景となっている。

２．研究の目的

本研究は，研究代表者がこれまで蓄積してきた近現代沖縄教育・文化研究の延長線上に位置づく発展的課題である。本研究が対象とするのは，沖縄の近代化がほぼ完成し，新思想の影響を受けた教育論，芸術論が定着する 1930 年代から，地上戦を経て米軍統治下におかれた 1972 年までの変革期である。主な研究目的は以下の 3 点となる。

まず初めに，沖縄の「子ども」の教育・文化の展開過程と課題を近代日本，および戦後米国の文教政策の研究史を背景に明らかにする。次に，戦前から戦後の教育者や文化人たちの著作や実践記録等の史料分析を通して，実践の実相や彼らの思想，「子ども」観を分析し，彼らが子どもの未来に何を構想し，その実践がどのような意味を持っていたのかを論じる。最終的には上記の研究成果を包括し，戦前から戦後をつなぐ沖縄の「子ども」の教育・文化実践史像解明を目指す。研究期間内に明らかにしたい研究目的を具体的に示すと以下の通りとなる。

①沖縄で施行された戦前の文教教育と戦後の占領政策を背景に，1930 年代以降から 1972 年の時代思潮，教育・文化実践の実態と課題を明示する。

大正デモクラシーの流入による沖縄子ども文化や教育への影響，戦後米国の文教政策下での変容や課題などを，教育者や文化人たちの取り組みから明らかにする。

②子どもの教育・文化的実践に関わった知識人たちの著作物，記録，教科書などの一次史料，聞き取り等を包括的に分析し，史料と実践の時代的意味を明らかにする。

沖縄島嶼部も網羅した沖縄教育関係史料の復刻版，各地域の学校史，回顧録，自叙伝，日記

や聞き取り調査等から，子どもに関わる具体的記述を抽出して記録し，考察する。

③研究成果を総合して戦前~戦後沖縄の「子ども」の教育・文化実践史像を描きだす。

①，②の分析を通して，戦前から戦後の「子ども」の教育・文化実践の連続と断絶がどこにあったのかを明示する。とりわけ，戦前から教育・文化実践に関わっていた知識人たちがどのような政治・社会的状況の中で何を実践していたのか，戦後米軍統治下の社会でどのような矛盾を抱え，思想の変更と修正を余儀なくされたのか，その中でも変わらず受け継がれたものは何だったのか等，個人の営みから当時の歴史事象の意味，子どもを取り巻く社会のありようを逆照射した解釈を示す。

３．研究の方法

先述した研究目的を実現するための研究方法と手順は以下の通りである。

まず，1930 年代以降の人的資源に着目し，戦前から戦後にかけて活躍した知識人たちの言説，実践の実態についての史料調査を行う。並行して沖縄関係の研究史料の収集，聞き取り調査などを行い，当時の歴史的背景を考察しつつ史料の分析を行う。なお，国内外の史料調査，関係者への聞き取り調査は，研究分担者の研究関心に即してそれぞれが実施し，情報を共有する。史料の内容と分析に関しては定期的に研究会を開催して考察を深めるとともに，各所属学会での発表を目指す。最終年度には研究の成果を報告書にまとめ刊行する。

次に，本研究期間内に行った研究方法について，年度ごとに具体的に記述する。

①初年度は研究準備期と位置づけ，沖縄関係史料の収集，国内外に散逸している情報収集と整理・蓄積を中心に行い，定期的に研究会を実施し情報共有した。

戦前から戦後の沖縄教育・文化状況については，当該機関に発行されていた新聞，沖縄各地の学校記念誌(創立 100 周年記念誌など)の史料調査を行った。また，調査を進めるうち，沖縄の戦後教育課程や教科書編纂には，沖縄同様に米海軍軍政下におかれたミクロネシアの教育改革の影響があるのではないかという仮説が浮上した。さらに，戦前にミクロネシアに移民として渡った人々の文化資本が，戦後の教育や文化に及ぼした影響も見過ごせないことが示唆された。そこで，北マリアナ大学北マリアナ諸島自治連邦アーカイブ，北マリアナ諸島自治連邦議会図書館，グァム大学ミクロネシア地域調査センター，ハワイ大学ハミルトン図書館等で当時使用されていた教科書や学校復興および教員再教育などの史料をはじめ，戦中に発行されていた教育機関誌の調査を行い，史料発掘に努めた。あわせて東京藝術大学図書館，アジア会館アジア太平洋資料室，久保貞次郎記念館等で戦中の芸術家の動向や絵本の仕事について調査し，戦後沖縄の絵本作家・版画家として活動していた儀間比呂志のライフヒストリー研究，作品研究，聞き取り調査を実施した。

②研究期間の 2 年目，3 年目は課題追及の深化期と位置づけ，引き続き各自が問題関心に即して史料調査と考察を行い，研究成果を共有した。沖縄県内の調査では，沖縄県北部の国頭村立北国小学校保存文書「学校沿革」および「日誌」を閲覧し，戦災校舎復興運動と，同時期の USCAR の同校校舎建築事業についての記録を収集し，郷土史研究家への面談調査から写真ほか資料を収集した。また，戦前から敗戦直後にかけて標準語教育に熱心に取り組んだ山城宗雄に関して，当時の『琉球新報』『海南時報』などの新聞史料を収取するとともに，山城の勤務した小学校に関する公刊史料や文書史料の収集を行った。海外に関しては，沖縄からの移民が多く戦後復興にも支援を行っていたハワイに着目し，日本文化センター，ハワイ沖縄文化センター等での史料調査，沖縄移民 3 世の方の聞き取りを行った。また，米国公文書館(メリーランド)，米海軍軍文書調査を行い，サイパン，テニアンの日本人収容所内での教育に関する情報，サイパン島アメリカ海軍軍政府の月報を収集した。

それぞれの研究課題について意見交流の場を設けたことに加え，共通する「米軍統治期の教育・文化状況」については萩原真美氏を招へいし，「占領期沖縄における教育実践－人文科歴史・地理について」というテーマの研究発表と勉強会を実施した。

③最終年度はこれまでの調査の遺漏を補完し，研究成果報告書をまとめ公刊する予定であったが，コロナ禍の影響を受け一年研究期間を延長せざるを得なかった。そこで，オンラインでの定期的な研究会を実施し，最終の 1 年間は研究成果をまとめるための意見交換と原稿執筆にあてた。

４．研究成果

研究分担者の近藤は，これまでの調査に加え，引き続き沖縄県立図書館，沖縄県公文書館，うるま市立中央図書館等で，沖縄県内の小学校の学校記念誌（創立百周年誌等）のほか，1930～1950 年代の沖縄で発行されていた新聞『琉球新報』等，教員の回顧録などを調査し，その成果を「沖縄戦後初期の沖縄における日本語教育－山城宗雄に注目して」としてまとめた。その論考では，沖縄戦直後の学校教育の再開について概観したうえで，日本語教育（標準語教育）に取り組んだことで良く知られる山城宗雄に注目し，彼が 1930 年代に日本教育に取り組み始めた時期から沖縄戦をはさんで 1950 年代前半まで，その教育方法が驚くほど変化のないことを明らかにした。

研究分担者の泉水は，沖縄県国頭郡の戦後学校史に関する情報について研究期間中に収集した資料を精査し論稿を作成した。その際に，現地在住の識者との遠隔通信および国立国会図書館

憲政資料室の USCAR 文書閲覧，渋沢史料館への問い合わせ，地方新聞の記事探索により情報を補い事実関係の再確認と歴史的解釈を進め，「米国施政権下の戦災校舎復興と国頭村辺戸上原開拓事業」としてまとめた。また，比較研究の観点から，米海軍占領下にあったサイパンで作成され収容所の学童向けに使用された教科書（初級英語）の内容を検討した結果，同じく米軍の管理下で作成された沖縄の教科書（初等学校用）およびその背景となる文教政策について，日本的要素の扱いや地方の文化的特徴の扱いについて従来の解釈に再検討の余地があることが明らかとなった。

研究分担者の喜久山は，沖縄県公文書館，沖縄県立図書館およびうるま市石川歴史民俗資料館にて 1950～60 年代の図工・美術教育実践の史料を収集し，米軍統治期沖縄の図画工作，美術科のカリキュラムや実践授業について考察を行い，当時の授業指導案やテスト問題等，具体的実践資料をオンライン研究会にて提示し情報共有を図った。また，儀間比呂志の美術活動についての史料と作品調査を行い，その芸術活動の深淵を儀間のライフヒストリー研究と画法から探り，戦後沖縄美術における儀間の位置づけを「儀間比呂志の美術－画法に映る沖縄の近・現代」としてまとめた。

研究代表者の齋木は，引き続き絵本作家・儀間比呂志の絵本作品の分析とライフヒストリー研究を行い，全 32 作品の成立背景と画法，テーマを分析した。また，並行して《原爆の図》，『おきなわ島のこえ』（小峰書店，1982 年）で著名な絵本作家・丸木俊(赤松俊子)のライフヒストリーと旧南洋群島での美術活動を調査し，儀間と赤松の美術活動を比較検討した。その結果，両者の戦後の美術活動には，「生活者として」旧南洋群島で庶民と共に暮らした経験が色濃く反映されていたことを明らかにした。また，彼らが共通して「沖縄(南)」を題材にした絵本作品を発表していたのは偶然ではなく，第二の故郷として内在化していた地が，戦争によって破壊された「喪失体験」によるものではないかという仮説を示した。両者に共通する戦後絵本のテーマについての解釈は，沖縄文化協会 70 周年記念論集に論文としてまとめ発表した。

さらに，これまで手薄であった雑誌研究を進めるべく，沖縄戦の記憶の継承に雑誌メディアが与えた影響について検討した。具体的事例として「ひめゆり学徒隊」を取り上げ，女学生たちが戦場に向かう過程や戦後における「ひめゆり」物語の派生と伝承に関する考察を行った。その結果，「ひめゆり」という言葉には，明治時代のキリスト教受容過程において女性の「純潔」という意味が付与されていたこと，そのイメージが後年，少女雑誌によって「少女が見習うべき規範」として強化され，流布していったことを明らかにした。「ひめゆり」のイメージは，戦中には純潔であることと国家に忠誠を尽くすことが重要だという思想の定着を少女たちに促し，戦後は戦場に散った可憐な乙女たちの「殉国美談」物語を広めることに加担した。本研究では，こうした物語が大衆に受容されていく背景に，少女雑誌が大きく関わっていたことを示した。研究成果は「戦場の記録と記憶の継承における課題－「ひめゆり」のイメージ形成に少女雑誌が与えた影響を手がかりに」としてまとめた。

最終年度に，研究代表者は上記の研究分担者の論考を研究成果報告として取りまとめて出版企画を立案し，『立ち上がる艦砲の喰残し』(齋木喜美子編著，関西学院大学出版会，2022 年)を刊行した。刊行物によってより広く研究成果を世に問うとともに，研究期間内に協力いただいた各研究機関や沖縄県内の図書館，資料館等に寄贈し，研究成果の還元を図った。なお本研究課題の研究期間は終了したが，引き続き研究分担者と遠隔での研究会を実施し，さらに近現代沖縄の教育・文化実践の課題を深めていきたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 齋木喜美子	４．巻 沖縄文化協会七〇周年記念誌
２．論文標題 戦後の赤松俊子(丸木俊)，儀間比呂志の絵本に「南洋」が与えた影響－「南」へのまなざし－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 沖縄文化	６．最初と最後の頁 377-403
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 泉水英計	４．巻 94号
２．論文標題 柳田国男･折口信夫と文化人類学-『民族学研究』沖縄研究特集を焦点に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 神奈川大学評論	６．最初と最後の頁 100-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 喜久山悟	４．巻 5巻
２．論文標題 儀間比呂志の美術　～南からの反流～	５．発行年 2019年
３．雑誌名 こうさく学	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤健一郎	４．巻 134号
２．論文標題 石垣市立八重山博物館所蔵『沖縄教育』ー『沖縄教育』復刻版第一巻補遺	５．発行年 2019年
３．雑誌名 北海道大学大学院教育学研究院紀要	６．最初と最後の頁 171-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/b.edu.134.184	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 近藤健一郎	4．巻 第86巻第4号
2．論文標題 琉球政府期の沖縄への教育指導委員派遣ー文部省による沖縄教育援助	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教育学研究	6．最初と最後の頁 497-508
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 泉水英計	4．巻 34号
2．論文標題 コザにおける住民と米兵の多重性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 歴史と民俗	6．最初と最後の頁 167－193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋木喜美子	4．巻 6
2．論文標題 絵本作家・儀間比呂志に見る「南洋群島」美術の系譜ーライフヒストリーを手がかりに－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15096/fcu_education.06.04	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 Hidekazu Sensui
2．発表標題 Postwar Okinawa and TB Control Caught between the United States and Japan
3．学会等名 Association for Asian Studies Annual Conference
4．発表年 2022年

１．発表者名 齋木喜美子
２．発表標題 「ひめゆり」物語の発生と受容過程に少女雑誌が与えた影響
３．学会等名 2022年度関西学院大学教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 泉水英計
２．発表標題 文献にあらわれたレジストロ植民地
３．学会等名 神奈川大学国際常民文化研究所第9回共同研究フォーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 齋木喜美子
２．発表標題 儀間比呂志,赤松俊子の絵本にみる「南」へのまなざし
３．学会等名 沖縄文化協会2018年度公開研究発表大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 近藤健一郎・三島わかな
２．発表標題 近代沖縄におけることばの教育と唱歌－宮良長包作詞作曲≪発音唱歌≫の歴史的位置
３．学会等名 沖縄文化協会2018年度公開研究発表大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 泉水英計
２．発表標題 米校施政権下琉球の結核制圧事業
３．学会等名 沖縄文化協会第3回東京公開研究発表会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計7件

１．著者名 齋木喜美子編著	４．発行年 2022年
２．出版社 関西学院大学出版会	５．総ページ数 110
３．書名 立ち上がる艦砲の喰残し－沖縄における教育・文化の戦後復興	

１．著者名 泉水英計編著	４．発行年 2022年
２．出版社 御茶の水書房	５．総ページ数 380
３．書名 近代国家と植民地性－アジア太平洋地域の歴史的展開	

１．著者名 齋木喜美子	４．発行年 2021年
２．出版社 関西学院大学出版会	５．総ページ数 356
３．書名 沖縄児童文学の水脈	

１．著者名 泉水英計・貴志俊彦・名嘉山リサ	４．発行年 2020年
２．出版社 不二出版	５．総ページ数 281
３．書名 よみがえる 沖縄 米国施政権下のテレビ映像-琉球列島米国民政府（USCAR）の時代	

１．著者名 坂野徹・塚原東吾・岡本拓司・アルノ・ナンタ・宮川拓也・金凡性・藤原辰史・泉水英計	４．発行年 2018年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 404頁
３．書名 帝国日本の科学思想史	

１．著者名 渡邊欣雄・クライナー・ヨーゼフ・山内健治・村松彰子・吉田佳世・福岡直子・高桑史子・泉水英計	４．発行年 2018年
２．出版社 風土社	５．総ページ数 175頁
３．書名 国際社会の中の沖縄・奄美	

１．著者名 泉水英計「サイパン戦秘史にみる人種差別とナショナリズム」	４．発行年 2018年
２．出版社 御茶の水書房	５．総ページ数 全273頁(35-67頁)
３．書名 永野善子編『帝国とナショナリズムの言説空間』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	泉水　英計 (SENSUI Hidekazu) (20409973)	神奈川大学・経営学部・教授 (32702)	
研究分担者	喜久山　悟 (KIKUYAMA Satoru) (50273876)	熊本大学・大学院教育学研究科・教授 (17401)	
研究分担者	近藤　健一郎 (KONDO Kenichiro) (80291582)	北海道大学・教育学研究院・教授 (10101)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関